

首きり地蔵 (伝説・神崎郡神河町／旧：神崎郡神崎町)

― 上月平左衛門物語 ―

江戸時代の中ごろ神崎郡の北部でのできごとである。

夜、村の人たちが寝しずまるのをまって、庄屋の上月平左衛門は、そっと家を出た。京都へ行くためである。だれにも会わないで、はやく藩の領地から外へ出なければならなかった。となりは幕府がおさめている天領だから、そこまで行けば、いくら藩の役人でも手だしすることはできない。

その頃、平左衛門の村では、福本藩のきびしい取り立てによって、腹をすかしたり、病気になって死ぬ人がたくさん出ていた。百姓の代表として平左衛門は、何でも福本藩に行き、訳を話して、年貢を減らしてもらおうとしたのだったが、何度たのんでも、聞き入れてはもらえなかった。

しまいには、京都の所司代（徳川幕府の役所）へ行って、じかに話をするほか、貧しい村の人たちを救う道はないと考えるようになった。所司代へ行って、じかに話をするのは、藩の決まりによって、きつく止められている。決まりを破った者は、重い罰を受け、場合によっては殺されて、さらし首にされる。しかし、幕府の役人に村の人たちの苦しい生活のようすが知れたら、たとえ自分は死んでも、たくさん村の人たちの生活は、良くしてもらえるかもしれない。

そう考えた平左衛門は、ある夜、妻よねにこのことを打ち明けた。だまって聞いていたよねは、大きな涙をこぼした。

これまで百姓の人たちの生活を良くするために、日も夜もなく、平左衛門が苦心してきたことを、よねはよく知っていた。また、そのための苦労も共にしてきた。

平左衛門の家には、打ち合わせや相談のために、いつも百姓たちが来ていた。相談ごとは夜おそくまで続くこともめずらしいことではなかった。平左衛門が、どれくらい村の人たちにしたわれ、たよりにされているか、よねはよく知っていた。また、一度決心したことは思いとどまらせることができないことも知っていた。

山のすその道は、長い急な坂にさしかかった。そこを越えると領外に出る。

坂を越えて領外へ出た時、平左衛門は後ろを振り返って、つけてくる者がいないことを確かめた。

平左衛門は歩き続けた。どれくらいたった時だろうか。はるか後ろの方で、「平左衛門。平左衛門。」と呼ぶ声がしたように思った。振り向くと、遠い山すそに、ちょうちんの灯が二つ三つ見えかくれしている。

平左衛門は、どこかにかくれようかと思った。しかし、ここはもう福本藩の土地ではない、と思いなおした。ここは天領だ。ここでは、福本藩の役人にとらえられることはない。

そのうちに、またよび声がきこえた。むこうの山にこだましているが、今度はかなりはっきり聞こえる。それは、

「平左衛門。願いは聞き入れられたぞ。」

と言っているように聞こえる。平左衛門は歩みを止めた。

追ってきたのは、福本藩の三人の役人であった。

「福本藩のものだが、上月平左衛門殿ではないか。」

「確かに、平左衛門だが。」

「平左衛門殿、よろこんでほしい。願いは聞き入れられた。すぐに御殿に来るようにとのことだ。」

「あれほどまで、難しくいっておられたのに、それはまた、なぜ？」



平左衛門は不思議に思った。

しかし、藩主に会うことができたなら、百姓の困っている様子を詳しく話すことができる。平左衛門は引き返すことにした。

4人は、ちょうちんの灯を先にして歩き始めた。

道が福本藩の領地にはいって、下り坂になった時であった。ついてきていた役人の一人が、ひきょうにも、いきなり刀をぬいて、後ろから平左衛門にきりつけた。身をかわずひまも、何を言うひまもなかった。

刀は右首からななめに、深くかたさきにくいいって、血をふきあげた。平左衛門は、道のわきに、うつぶせにたおれた。

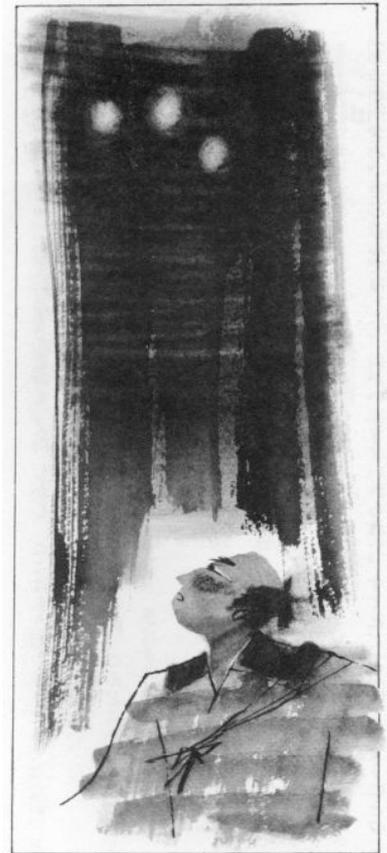
平左衛門のひどい死にかたを知った百姓や村の人たちは、おこってむしろを立て、竹槍を持って御殿へおしかけたが、まもなくとりおさえられてしまった。

村の人たちは悲しんで、平左衛門が殺された場所に、石の地蔵を建てる。しかし、その石の地蔵も、いつの間にか、右首の所から左胸にかけて、ぱっくり割れていた。ちょうど平左衛門がきられたと同じに。

いたましく思った村の人は、もう一度石の地蔵を造ったが、それも同じように割れた。何度造りなおしても、同じであった。

いまでも、その地蔵は、神崎郡神崎町根宇野の道のそばに、首がかけ落ちたまま立っている。その名を首きり地蔵、またの名をけさぎり地蔵という。

(再話・鎌谷嘉道)



出典：「兵庫県の民話」日本児童文学者協会編 県別ふるさとの民話43 偕成社
初版1983年5月

<http://www.kamikawa-kankonavi.jp/archives/301/>

江戸時代の享保元（1716）年から宝暦2（1752）年にかけて稲作は害虫、冷害、洪水等の凶作飢饉に度々遭遇し、全国的な大被害に見舞われました。しかし年貢の取り立ては改善されなかったため、地元福本藩民の生活は考えも及ばない過酷なものでした。上月平左衛門景重は、その悲惨さを見るに忍びず幕府の役人に直訴しようと訴状を懐に携え旅に出ましたが、志半ばに役人に捕らえられ、根宇野で斬殺されてしまいました。その上月氏伝承の地として、公德碑等が設置されています。

所在地 〒679-3114 兵庫県神崎郡神河町新野



http://web.pref.hyogo.jp/area/c_harima/area_00005.html

上月平左衛門墓碑 神河町

上月氏は、赤松則村挙兵以来、赤松氏の家来として盛衰を共にした。則村が秀吉に置塩城を明け渡した天正6年（1578）ごろから、土着帰農し、平左衛門景吉が、大庄屋として当時飾西神西郡28カ村の長年の利権争いを解決し、亀力坪山の入山権を確保した。

その恩恵は現在にいたり、近くの人々が集まり、上月平左衛門の業績を偲んで建てられている。